

原始仏教からアビダルマ仏教に至るまでの縁起思想研究

学位論文内容の要旨

第1篇は原始仏教の縁起説を扱う。第1章では、縁起説が簡潔なものから十二支縁起へと体系化されていく過程を、五支縁起を中心とした資料をもとに論じている。はじめに、古層經典ではupadhi(依著)が苦しみの原因であるという縁起説に着目し、その教説は散文經典のSN.12-66に取り入れられ、「可愛なる色・快い色に対する無知→愛→upadhi→苦」という縁起系列に発展したことを、従来の研究を精査したうえで後付けている。upadhiの意味は詩句でsaṅga(染著)とされている例などから煩惱に基づく執著という意味するものとなるが、SN.12-66に説かれる比喩にしたがえば、愛を原因として起こる何らかの行為を意味することになる。このようなupadhiを説く縁起説はすでに詩句においてupādāna(取)と同一視されて、「愛→取」に向かって展開する系列が予想され、五支縁起に発展する際には、四支縁起がまず先に還滅分の方から五支に展開し、その後に「愛→取→有→生→老死」という五支縁起が成立したことを明らかにしている。さらに五支縁起は六処を起点とする縁起説と結合することになるが、同じく六処説と結合している縁起説でも、その中に三つの段階の発展が認められ、これ以降、「識⇄名色→触→受……」という六処を欠いた系列を説く九支縁起、そしてそれに六処を加えた十支縁起へと展開し、さらに無明と行の二つを加えて「無明→行→識→名色……老死」という系列を有する十二縁起が、完成した縁起説として經典の中で圧倒的多数を占めるに至るようになったのである。

第2章では、縁起を解説する際に用いられる定型句について、その意味内容を縁起説との関係において考察している。すなわち、十二縁起はそれぞれの支分がidamという指示代名詞に置き換えられて、「これがある時、かれがある。これの起こることから、かれが起こる。これがない時、かれがない。これの滅から、かれが滅する」という四句から成る定型句によって表現されるが、この定型句は經典の中で十二縁起と説かれる例だけには限られず、例えば「触→受」という二支分だけの関係を説くSN.12-62においても、その二支分の関係を表すものとして用いられ、『増壹阿含』においては、六根がそれぞれ因縁和合によるという教説を説明する際に用いられていることを指摘する。このような十二縁起の公式化という動機から生み出された定型句は、他の教説の説明に援用されることもあるが、そのような例はごく僅かであることを注意している。この定型句は流転分に二句・還滅分に二句が配され、二通りに表現されているが、このことについて、その趣意が何であるのか、意味内容は同じなのかどうか研究者の間には見解の相違があった。そして、二通りに表現されているこの問題については、後代の仏教徒の間でも議論の対象となっていることを指摘し、さまざまな解釈のうち、多くは二通りの表現を取っている定型句それぞれの意味内容は同一でないと解釈され、定型句は異時的な継起関係と解釈される場合が多いことを明らかにしている。第1篇における検討の結果、これまで議論の多かった十二縁起へと支分が発展していく過程や十二縁起と定型句の関わりを明瞭な形で示すものとなった。

第2篇では原始仏教において確定した十二縁起について、アビダルマ仏教の縁起解釈を扱う。第1章では、南方上座部の代表的な論書*Visuddhimagga*において十二縁起を煩惱・業・異熟という体系によって解しているが、異熟とされる識・名色・六処・触・受という五つの支分が果たして本当に異熟と解釈されているかどうかを検討している。そのうちの「識→名」「名→意処」という関係だけは非異熟としても解釈され、表面的には矛盾しているかのようであり、注釈の*Paramatthamañjūsāṭīkā*や*Vibhaṅga-Aṭṭhakatā*は「識→名色」という関係は勝義としての名色を意味できると解釈していたが、同じくこのような勝義としての名色を説く*Visuddhimagga*見清浄章は、勝義としての名を異熟・非異熟から成る八十一の世間心とそれに相応する七つの共一切心所と定義する。名は前後の支分と合わせてこの一切の世間心を表すことができるため、「識→名」「名→意処」という関係は異熟支分でありながらも、同時に非異熟としても解釈されていることを明らかにしている。この「識→名色」という関係は刹那刹那に生じては滅しつつ相続しているすべての世間心を余すところなく知らしめるものであるが、それはさらに「勝義としてはこの名色以外に何もない」という無我の理解に直結するものである。そして、南方上座部に見られる名色という支分の特色、とりわけ「識→名」「名→意処」の解釈上の特色は、心識を中心に据えて縁起を解釈する立場を反映していることを明確にしている。

第2章では、説一切有部について、南方上座部同様十二縁起を三世兩重の因果として解釈しているのは全く同じであるが、特に説一切有部は『婆沙論』以降、各支分がみな五蘊であるという分位縁起として解釈したことに着目している。このような解釈は名色が五蘊と理解されることによって成立したと考えられるが、しかしそのような解釈は兩部派で共通しており、ほかにも分位縁起成立に何らかの要素があることを推定し、説一切有部の伝える初期論書『法蘊足論』の縁起解釈を検討し、そこにおいては行という支分に特徴的な解釈が見られることを指摘している。すなわち、行という支分は南方上座部において一心所法としての思(*cetanā*)と解釈されて、心識を重視して縁起を解釈する傾向を示しているのに対し、説一切有部においては行という支分が五蘊に通ずるとされたり、名色(=五蘊)と同一視されたり、さらに有為法全体の体系にまで視野を拡げつつ解釈されているのであり、『法蘊足論』以外の論書における解釈なども合わせて検討した結果、説一切有部において五蘊全体を意味できる支分は行と名色という二つであり、この支分に対する解釈上の特色が、分位縁起成立の一要素となった可能性を示唆している。さらに、このような行という支分の解釈は、一切の有為法を考察対象とした説一切有部の思想傾向に連なってゆくものであることを論じている。第2篇における検討の結果、同じ十二縁起の解釈であっても、南方上座部の縁起解釈は名色のうちの名・識・意処という支分に特色があり、心識を重視する思想傾向を反映しているが、それに対して説一切有部の縁起解釈は行という支分に特色があり、さらにそれは有為法全体を考察対象とした思想傾向を反映していることを結論し、兩部派の縁起解釈の相違を明確に示している。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 藤 井 教 公

副 査 教 授 土 屋 博

副 査 教 授 坂 井 昭 宏

副 査 助 教 授 細 田 典 明

学 位 論 文 題 名

原始仏教からアビダルマ仏教に至るまでの縁起思想研究

平成10年12月11日に学位審査委員会を発足し、以降5回の審査委員会を開催し、本申請論文について慎重に検討するとともに、平成11年1月22日口述試験を実施した。以下に、論文審査の要旨を記す。

本論文は仏教の最も基本的な思想である縁起説について、原始仏教を中心に阿含・ニカーヤを渉猟し、これまでの研究を考察するとともに、阿含・ニカーヤを伝えた部派のアビダルマにおける縁起説の詳細な解釈を検討するものである。

すなわち、原始仏教の縁起説の中で、五支縁起を中心とした前後の発展段階に焦点を当て、簡潔なものから十二支縁起へと体系化される過程を考察する。また、縁起説を解説する際に用いられる定型句について、その表現内容と意義を種々の縁起説との関係において論攷する。さらに、縁起説は部派の論書類において詳細に解釈されており、論書における縁起解釈を検討することは、原始仏典の簡潔な縁起説やそこに見られる問題点を捉え直すためにも有益であるという観点から、原始仏教の縁起説とアビダルマ仏教の縁起解釈の二部構成にして検討する。

第1篇第1章「縁起説の展開」は、先学による研究を十分に踏まえた、きわめて穏当な見解であるといえ、特に古層經典(主に韻文)と縁起説がまとまって説かれる散文の經典の接点として、upadhiについて一節を設けて論じている点は重要である。この語は難解で、従来の縁起研究の中でも言及されることは少なかったものである。しかし、この語はジャイナ教の古層經典にも散見され、現在の原始仏教研究はジャイナ教も視野に入れることが必要とされる中で、さらに考察を深める必要のあるものといえる。第2章「縁起説の定型句」は、その解釈に異論の多いなかで、文脈の中で定型句の意義内容を捉え直すことによって、従来の議論を整理することが可能となった。また、アビダルマの定型句解釈を検討し、定型句は異時的な継起関係と解釈される場合が多いことを明らかにしている点は、定型句の解釈をめぐる研究上の新知見である。

第2篇第1章の「南方上座部の縁起解釈」と第2章「説一切有部の縁起解釈」はともに、煩瑣なアビダルマ教学を丹念に読み進めた研究成果であり、従来の縁起研究においてこのように精緻に、南伝と北伝の両アビダルマ文献を研究したものはなかった。第1章では、

業異熟の問題が縁起説と不可分の関係にあり、その上で名色の特殊性を、第2章でも同様の方法によって行の特殊性を明らかにしている。なお、両章の研究成果の一部は既に学会発表をおこない、一定の評価を得ているものである。

本論文が、細かな議論まで丁寧に検討を重ね、文献を精緻に読解しているものであることは委員会全体の共通した意見であった。他方、方法論の上で歴史的・社会的背景の考察や哲学一般の議論を積極的に取り込んでいく姿勢も必要ではないか等の意見もあったが、こうした意見は今後の研究に反映されるべき課題であるといえる。本論文は広範な阿含・ニカーヤやアビダルマを、新資料も含めて精査し、膨大な研究史を整理した当該研究領域における着実な研究成果であり、口述試験の結果も踏まえて、全員一致して、林寺氏に博士(文学)の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。